

地域情報（県別）

【岐阜】ライフワークは総合診療を地域に広めること-安藤大樹・あんどう内科クリニック院長に聞く◆Vol.2

2020年9月4日（金）配信 m3.com地域版

岐阜県岐阜市にあるあんどう内科クリニックの安藤大樹院長は、総合診療について学び、地域で実践している。安藤氏に、総合診療を自らの軸とした経緯や、「総合診療のマインドを地域に広めたい」という思いについて聞いた。（2020年8月3日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

――総合診療について学び、実践されています。そのきっかけと経緯を教えてください。

当院を開業したのは曾祖父で、私は4代目。「地域のどんな患者さんにも寄り添える」のが医師のあるべき姿だと思って育ちました。ただ、その当時は自分に医師としての能力があるとは思っておらず、医師になるという意識はなかったというのが正直なところです。

運よく医師の道を歩み始めた私が「総合診療」に出会ったのは、大学病院で研修を受けていたときです。医療の現場では、当然ながら専門に特化した診断・治療が行われています。それはもちろん必要不可欠なことなのですが、自分の中にあった医師像と違っていたのです。「専門性を突き詰めていくにつれて、患者さんとの距離が離れていってしまうのではないか？」と感じ、違和感を覚えました。

また、患者さんと総合的に接するのは研修医の2年間だけで、その後10年以上専門分野で経験を積んでから、地域に戻って総合的な医療を行うというキャリアパスにも疑問を感じました。加えて、大学病院の外来を経験して、患者さんに対して一方的に与えるような医療、「この病気は診るけど、この病気は診ない」と切り捨てるような医療はしたくない、という思いが強まりました。

そんなとき、全人的に人間をとらえ、特定の臓器・疾患に限定せず多角的に診療を行うという総合診療の理念を知り、共感しました。「スーパー町医者になるにはこの科しかない！」と思い、総合診療を徹底的に学ぶことを決心したのです。また、幸いなことに、入局した科では総合診療のほか、10年以上救急外来の指導も行っていましたので、二次・三次救急の知識と経験を得ることもできました。

――総合診療を学ぶ際、苦労した点はありますか？

今でこそ総合診療という名前の認知度も上がってきましたが、私が医師になった当時、総合診療は日本ではマイナーな領域でしたから苦労の連続でした。大学病院では、ほぼゼロから総合診療を行う科の立ち上げに携わったのですが、周りの専門科から理解を得ることが難しかったです。ただ、専門科と密に関わり、それぞれの専門領域について勉強したおかげで、総合診療医に必要な「診断力」はかなり磨かれたと思います。

――どんなときに医師として手応えを感じますか。

総合診療の醍醐味は「診断」にありますので、難しい疾患の診断がついたときはうれしいですね。「いろいろな病院、クリニックに行ったけど、診断がつかなかった」「複数の検査をしたけど、『年齢のせい』『ストレスのせい』と言われてしまった」と悩み、傷ついている患者さんが少なからずいらっしゃいます。そうした患者さんが来院され、総合的に診て正しい診断、難しい疾患の診断にたどり着けたときには大きな喜びを感じます。自分の今までの知識、経験が生かされたことに手応えを感じますし、患者さんの役に立てたと実感できる瞬間です。

診断がつかなくても、患者さんの経過を見続け、少しでも幸せな未来に導けるよう寄り添うことを大切にしています。極力「年齢のせい」「ストレスのせい」という診断はしないと決めているので、常に勉強して知識をアップデートし実力を磨くしかありません。プレッシャーもありますが、日々鍛えられています。

――地域の医療連携についてお聞かせください。

愛知県の大学病院にいたときに比べて、とてもやりやすいと感じています。大学病院をはじめ、岐阜市民病院、岐阜県総合医療センター、岐阜日赤病院、朝日大学病院、長良医療センター、岐阜ハートセンター、松波総合病院と、高い専門性を持つ中核病院がエリアにいくつもあります。総合診療を実践するためには病診連携が不可欠なので、こ

ういった中核病院の存在はありがたい限りです。また、それぞれの地域連携室が積極的に動いてくださるので、病診連携でストレスを感じることはありません。また、回復期病院も比較的多くあり、高齢者施設や訪問看護ステーションなどは他地域より充実していると感じます。

病診連携では、可能な限り正確な情報提供を行うとともに、退院後の適切な経過観察、ケースワーカーとの密な連絡を心がけています。

――今後、どのような医師像を目指しますか？

患者さんの健康を守ることを最重要とし、バランスのとれたドクターを目指したいです。専門性をきわめるというより、地域のニーズに合った医師になっていきたいですね。また、自身のライフワークとして、総合診療のマインドを広めることに力を入れています。15年以上、客員講師や指導医として医学生、研修医の教育に携わっていて、現在は岐阜市民病院でレクチャーを行ったり、岐阜大学の学生さんの実習のお手伝いをしたりしています。今後も、全人的な医療を提供できるドクターを増やしていきたいです。

私は、総合診療のマインドを持った医師が多いエリアは、医療の質も向上すると信じています。岐阜エリアは大都市圏と異なり、総合診療が文化として十分に根づいているとは言えないので、今後も総合診療のエッセンスを若いドクターに伝えていきたいと思います。

――多忙な日々だと思いますが、プライベートで大切にしている時間はありますか。

大学時代からバンドをやっています。メンバーは全て同じ大学出身のドクターなのですが、その場では仕事の話は一切しません（笑）。自分たちの好きな音楽に打ち込む、無心になれる時間です。COVID-19の影響で最近は集まれていませんが、これからも大切にしていきたいつながりです。

――若い世代のドクターに向けて、一言メッセージをお願いします。

患者さんの目を見て、膝を突き合わせて診察してほしいです。近年、電子カルテを見ながら診察するドクターが増えていて、悲しく思っています。受診すること、入院することは、患者さんにとっては人生の一大事。患者さんの人生に敬意を払うことは、診察の基本だと思います。それに、患者さんの姿を正面から見ることで、診断に結び付くヒントに出会えるかもしれません。診察技術を身に付けるにはある程度経験が必要ですが、患者さんと目を合わせること、膝を突き合わせることは、すぐにでもできるはず。ぜひ次に会える患者さんから、実践してみてください。



あんどう内科クリニック（クリニック提供）

◆安藤 大樹（あんどう・だいき）氏

2004年藤田保健衛生大学（現：藤田医科大学）卒業。同年藤田保健衛生大学病院（現：藤田医科大学病院）初期研修、2006年一般内科入局。2007年より医局長、2011年総合診療内科／救急総合内科医局長を務める。2015年、岐阜市民病院総合診療・リウマチ膠原病センターに医員として着任。同年、同大学救急総合内科客員講師。2017年より、あんどう内科クリニック院長として治療に当たる。2018年岐阜市民病院研修管理委員会外部委員、2020年岐阜大学医学部総合病態内科学客員講師。2010年～2014年、藤田保健衛生大学病院最優秀指導医賞受賞。

【取材・文＝加藤 由起子】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

